

麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果

令和8年5月28日
埼玉県病害虫防除所

病害虫防除所では、イネ縞葉枯病の発生量を予測するため、毎年5月に麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度を調査しています。

今年度の調査の結果、麦類ほ場におけるヒメトビウンカの生息密度は29.2頭/m²で、過去10年で2番目に高く、平年(13.7頭/m²)の約2倍に達しています。また、生息密度の地域間差が極めて大きく、局所的に平年を大きく超える(約14.2倍)生息密度の調査地点も確認されました。

本年のヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は3.0%で平年(4.3%)よりも低いですが、第1世代幼虫の生息密度は高いため、コシヒカリ、キヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種を作付けている場合はヒメトビウンカの防除を徹底しましょう！

1 イネ縞葉枯病について

(1) 病徴

生育初期に感染すると、新葉が黄白色に退色し、こより状に巻いたまま弓状に徒長する。このような株は「ゆうれい」症状とも呼ばれ、分けつが少なく、枯死する。幼穂形成期以降の感染では出穂しないか、出穂しても出すくみ症状となり、これらの症状によって減収する。



縞状病斑とゆうれい症状



出すくみ穂

(2) 病原の特徴及び伝染

ウイルス病でヒメトビウンカが媒介する。ウイルスはヒメトビウンカの体内でも増殖し、卵を通じて次世代に伝染する。麦類や畦畔雑草地で増殖したヒメトビウンカ第1世代保毒虫が、水田に移動してイネに感染させ発病する。感染・発病しやすい時期はイネの生育初期～幼穂形成期までで、その後は感染しにくくなる。

なお、本県育成の奨励品種である「彩のきずな」「彩のかがやき」「えみほころ」は、本病に抵抗性を持っており、本田での発病はほとんど見られない。



ヒメトビウンカ3齢幼虫(体長約1mm)

2 調査方法

麦類の乳熟期～糊熟期(令和8年5月12日～14日)に、県内16地点の麦類ほ場において、1地点3か所で1m幅(0.125～0.75㎡)の麦穂を10回叩いて落ちて来るヒメトビウンカを採取し、1㎡当たりの生息密度を算出した。

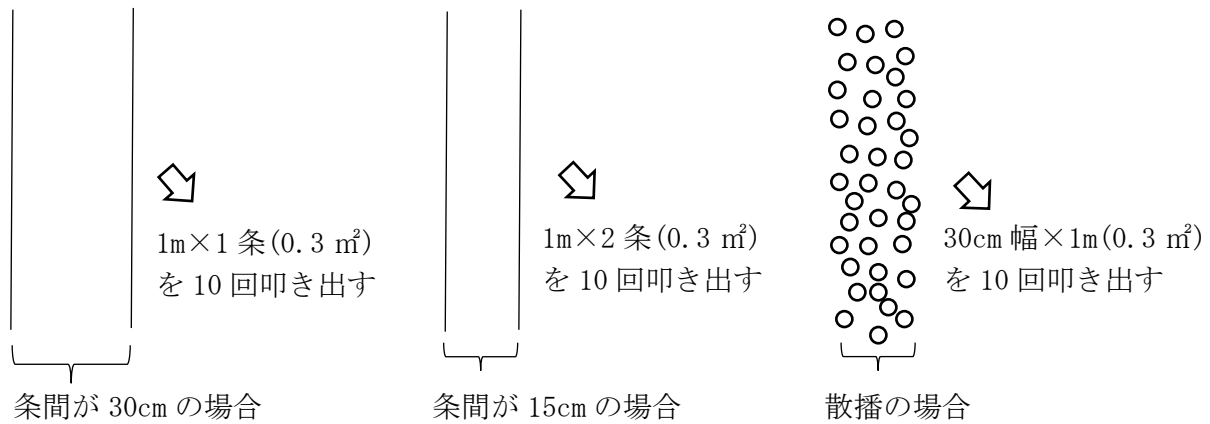


図1 麦類ほ場内ヒメトビウンカ叩き出し調査方法

3 調査結果の概要

今年度の調査の結果、麦類ほ場におけるヒメトビウンカの生息密度は29.2頭/㎡で、過去10年で2番目に高く、平年(13.7頭/㎡)の約2倍に達している(図2)。また、生息密度の地域間差が極めて大きく、局所的に平年を大きく超える(約14.2倍)生息密度となっている(表)。

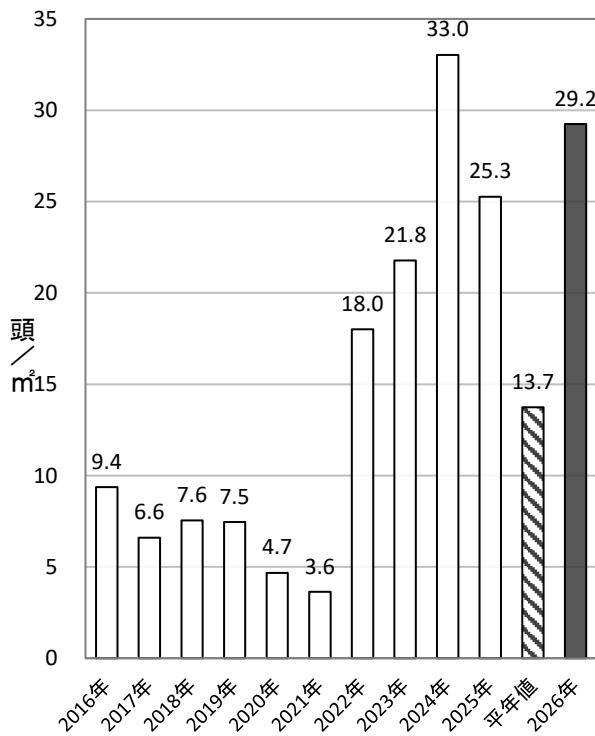


図2 麦類ほ場内ヒメトビウンカ生息密度調査結果の推移(県平均)

表 令和8年度麦類ほ場内ヒメトビウンカ生息密度調査結果(単位:頭/㎡)

調査場所	麦種	成虫	幼虫	計
川越市古谷上	小麦	0.0	2.2	2.2
坂戸市片柳	小麦	0.0	15.6	15.6
熊谷市樋春	小麦	0.0	3.3	3.3
熊谷市中曾根	小麦	0.0	65.2	65.2
吉見町万光寺	小麦	0.0	194.4	194.4
川島町鳥羽井新田	小麦	0.0	14.4	14.4
嵐山町吉田	小麦	0.0	1.1	1.1
鴻巣市屈巢	小麦	0.0	15.3	15.3
行田市上池守	小麦	0.0	33.3	33.3
行田市前谷	小麦	0.0	22.2	22.2
加須市大越	小麦	0.0	26.7	26.7
熊谷市今井	小麦	0.0	45.3	45.3
上里町長浜	小麦	0.0	8.9	8.9
本庄市児玉町	小麦	0.0	7.8	7.8
白岡市太田新井	小麦	0.0	3.3	3.3
蓮田市駒崎	小麦	0.0	8.9	8.9
平均(16地点)		0.0	29.2	29.2
昨年(2025年)		0.0	25.2	25.3
平年(過去10年平均)		2.2	11.5	13.7

4 今後の防除対策

本年のヒメトビウンカ越冬幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は3.0%で平年よりも低いですが、麦類ほ場内の生息密度は過去10年で2番目に高い。このため、コシヒカリ、キヌヒカリ等の縞葉枯病感受性品種において、箱施薬せずに移植した場合は本田防除を、現在育苗中の場合は箱施薬による防除を実施する。